

令和 6 年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

大阪教育大学
附属天王寺中学校

1 附属天王寺中学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属天王寺中学校

(2) 所在地

大阪府大阪市天王寺区南河堀町4-88

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員432人(1学級: 36人)

(4) 幼児・児童・生徒数

429人(男子217人・女子212人)

(5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 教諭 18人(うち, 臨時的雇用4人,),
非常勤講師 7人
事務職員 3人(専任1人, 事務補佐員2人), 臨時用務員(用務員)1人

2 附属天王寺中学校の特徴

質実剛健の校風のもと, 生徒一人ひとりがお互いの多様性を尊重し合う中で, 主体的に協同的な学びを展開していくことを重視し, 将来の市民社会をリードしていくための“生きる力”の育成をめざしている。
天王寺型中高連絡進学に基づく6年一貫教育の研究と実践を続けている。

3 附属天王寺中学校の役割

- (1) 大阪教育大学と一体となり, 教育の理論と実践に関する研究を行うこと。
- (2) 教育に関する理論を実践し, 授業や研究会で実証すること。
- (3) 大阪教育大学の教育実習機関として, 効果的な実習活動を行うこと。
- (4) 大阪教育大学が行う現職教員の再教育の一端を担うこと。

4 附属天王寺中学校の学校教育目標

- ・ 正義を愛し, 真理を追究する旺盛な向学心を持ち, 透徹した判断力を養う。
- ・ 強固な意志を持ち, 頑健な心身を育て, 自主的・積極的な実践力を身につける。
- ・ 他人を愛し, 自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。
- ・ 社会の一員となるための, 責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。

5 附属天王寺中学校の学校教育計画

1. 生徒の学力と, 「生きる力」を育てる活動を, 各教科・分掌で工夫し, 実践する。また, 自治会やホームルーム等の集団における生徒の自主性と主体性に基づく諸活動をする。
2. 生徒の活動を支えるための, 教育環境を整備・充実させるとともに, 生徒の将来に向けた進路選択と実現に向けた取り組みを行う。
3. 学校独自の取り組みを通してカリキュラム全体の充実を図り, 教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

6 附属天王寺中学校の令和6年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準	
A	高いレベルで達成できた
B	達成できた
C	一部達成できなかった
D	ほとんど達成できなかった
E	判定できない

学校教育目標	・正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ・強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ・他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ・社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、自治会やホームルーム等の集団における生徒の自主性と主体性に基づき諸活動を活用する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力を十分に発揮させる。	■生指部 全教員が生徒会・自治会活動(部活動指導、議会・委員会の運営等)をより活発にし、様々な取り組みを実現することができた。また、校種や発達段階に応じた指導体制も構築し、生徒一人ひとりが成長し活躍できる場面をつくることのできた。	生徒会・自治会活動(部活動指導、議会・委員会の運営等)をより活発にし、様々な取り組みを実現することができた。また、校種や発達段階に応じた指導体制も構築し、生徒一人ひとりが成長し活躍できる場面をつくることのできた。	生徒会・自治会活動に対する教員の関わりがまだまだ限定的であるため、全教員がより積極的に関わる体制を、中高生徒指導部で連携し、検討していく。	A		特記事項なし
	■研究部 生徒の発達段階に応じて授業立案ができるよう、模倣と省察の過程で理論知と実践知を統一する研究的な学びが実践できるような研修内容を検討する。	最新の教育事情に関する研修を行った。また、推進日を活用し、教育研究会の中間発表などで、中高全体で授業を検討する場を持つことができた。	実際の授業を見学する機会があまり持てなかったため、相互見学する仕組みを構築する必要がある。	A		特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	■健康人権教育部 中高で教員のニーズに応じた研修を開催し、教員一人ひとりの生徒対応力の向上や学校安全に対する意識の向上を図ることができた。	AED講習会や避難訓練の振り返りを通じ、教員一人ひとりの生徒対応力の向上や、学校安全に対する意識の向上を図ることができた。	熱中症予防や捻挫・擦り傷といった軽症の対応、救急者や病院への連絡手順の確認など、放課後や土日休み等における生徒対応について研修を行うことが必要である。	B	子供が心臓マッサージや避難訓練実施を覚えている事から意識は共有出来ている。学校時間外に於いては保護者協力等無理な部分が多いと考えます。	A
	■保健科 課題解決的な学習を授業を進める中で、協働しながら個々人の技術向上に繋がる指導を行う。ルールや練習方法など自分たちで調べ、実践していく中で自他を尊重する態度を養う。	他者と協働し、学びあいや教えあいなどを通じて、技術向上につなげることが出来た。各学年における運動技術の習得に向けて、生徒間での話し合いも活発になっている。	自己及びグループの課題に対して、答えの提示や指示でなく、気づきを促すような指導をするなど、課題解決に向けての提示の仕方を工夫していく。	A		特記事項なし
	■国語科 討論活動、発表活動とそれに至る話し合いや意見交流の機会を担保し、教科の内外で、個人が様々な学びを得ることのできる学習集団を育てる。	各学年において、協働的な学習課題を設定することができた。その過程で、さまざまな形式（ディベート、ワールドカフェ、少数・多数など）での議論を実施することができた。教科に留まらず、議論できる学習集団の素地を養うことができた。	協働的な学習課題の質を検討し、より高める必要がある。また、他教科とも連携し、生徒集団の議論のあり方を、適宜情報収集していく必要がある。	A		特記事項なし
	■社会科 民主的、平和的な社会の形成者として判断する際に必要となる社会科の知識を獲得させ、社会で起こる諸問題に対して多角的な観点から、主体的に判断できる生徒を育てる授業を実践する。	民主的、平和的な社会の形成者として必要な知識を多岐にわたって獲得させ、現代社会の諸課題に対して多角的に考察し、主体的に判断できる生徒を育てる授業を実践した。	より深い知識と態度を生徒が身に付けることができるように、教科としてさらなる授業研鑽を行う。また教科として得た知識を教科や文理の枠を越えて、応用できるように、さらなる授業研究を行う。	A	授業参観での内容からしても生徒が主体で考える内容であり実際に理解しました。	A

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	意見・理由	評価	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	■ 数学科 グループワークやペアワークを伴う数学的活動を積極的に進めていく。さらに、授業改善のみならず、パフォーマンス課題を用いた数学的活動を数学科内で収集・共有する。また、それを、学校内外問わず、個人や教科全体としていろいろなところへ発信する。	グループワークやペアワークを取り入れた操作や問題解決を伴う数学的活動を、各学年・各クラスで実施できている。実践した内容については、教育研究会やふだんの授業展覧会、研究集会などで発信し、継続的に授業改善を図ってきた。	今後の課題としては、授業実践の成果をさらに体系化し、教育研究のレベルとして学問的・科学的に検証・発信していくことである。そのために、取り組みのプロセスや結果を定量的・定性的に分析したり、学会発表や論文執筆などを通じて外部へ積極的に情報発信していく。		A	特記事項なし
	■ 理科 実験や観察などを通して「協働する能力」や「科学的に探究する力」を伸ばすための授業実践に取り組む。具体的に、実験の設計そのものや得た結果について協働的に議論することを促す授業展開を積極的に取り入れる。	中高ともに、「どのような方法や道具で調べることができるか」や「得られた実験結果はどういうことを意味しているか」といった発問や議論の時間を積極的に設け、協働学習の姿勢や生徒の思考を促した。	ICTを一層活用し、班の中の協働にとどまらず他クラスあるいは先輩にあたる生徒による議論の内容を学習の材料にするなど、学習に深みをもたせる工夫を検討していく。		A	
	■ 音楽科 失敗を恐れず、仲間と協働してのびのびと表現できるような音楽授業を展開することでも、音楽技能を伸ばすとともに、生徒の心理的安全性をさらに高める。	多様な学びの形態を取り入れ、生徒の持てる力を最大限に引き出す授業づくりに取り組んだ。アンサンブルを通して「協働する力」を育み、生徒自身が自己表現する喜びを実感できる授業を展開した。	心理的安全性を高め、深い学びを実現するための指導の工夫について引き続き検討していく。	合唱等でパート別に行ったり工夫をした授業で音楽会の成功にもつながっていると考えます。	A	
						コロナ禍を乗り越え、構内に歌声が響くようになった。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	意見・理由	評価	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	■美術科 「造形的な見方・考え方」の育成を目指す。普段の生活で身のまわりを造形的な視点で捉え、自分なりの意味や価値を生み出す意識を育む。(中)	昨年度に引き続き、経験学習による習得のサイクルを構築し、系統的・合理的知識も含めて、自己の造形的な視点を働かせる授業を実践。 大阪教育大学 谷村特任准教授による、身体感覚を意識的に働かせる活動をもとにした陶芸の授業を実施	外部人材の活用に伴い、人的環境づくりに注力できたが、併せて物的環境(設備、材料、用具)の充実にも取り組む必要がある。		A	特記事項なし
	■英語科 Can-Do リストに基づいて、パフォーマンス課題の設定や評価について検討する	生徒の発達段階を考慮し、スモールステップでの学びを意識した課題を日々の授業等で設定した。パフォーマンス課題に生徒たちが主体的に取り組むことができた。また、評価方法に関し、ルーブリック評価やふり返りの見取りなど多面的な評価を行った。	多様なパフォーマンス課題を設定し、評価方法についてもさらに工夫する。		A	特記事項なし
	■技術家庭科 技術・家庭科では、単に知識理解だけでなく、技能獲得のために実践を通じた授業実践を多く取り組んでいる。同じ作品や作業でも、個々でやり方の違いや個性が出てくることとがある。その中で、班で教え合うことで、協働学習の要素が出てくるものと考ええる。	実習や実験を取り入れる際には、ロイロノートやクラスルームなどのICTを活用し、プログラム教育の充実を図った。Chromebookの活用においてはどの生徒も遜色なく活用できるようになった。	今後はさらなるICTの活用と技術の向上と、効率的な授業展開を目指す。また効率化を図った上で探究の時間を充実したい。設計図など、書くことに重点を置いた指導についても検討していきたい。	授業参観でアプリを使い生徒の意見を共有している事からしても内容が充実している事が解った。	A	特記事項なし

6 附属天王寺中学校の令和6年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準				
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である	
B	達成できた	B	おおむね適切である	
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない	
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない	
		E	判定できない	

学校教育目標	・正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ・強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ・他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ・社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。	
学校教育計画	2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択と実現に向けた取り組みを行う。	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(1) 生徒の将来の目標と 生徒を取り巻く社会の状況 も含めた進路についての意 識を深めさせ、その実現に 向けた支援を行う。	■教務部 校務支援システムの円滑で 安定した運用をはかるとと もに、小中高間の進路用 データの円滑な引継ぎを進 路指導担当と連携を図りな がら支援する。(中)進路担 当者と連携して、中学校内 進路用個表の運用を支援す る。 (高)教務規定を現状に合っ た形に整理し、周知する。 特に観点別評価について、 各教科の取り組みをもとに 文言を整理する。	附属学校課と連絡を取りなが ら校務支援システムを安定し て運用することができた。ま た、進路担当者と連携を図り ながら、進路用データの作成 の協力を行った。 (中)進路用の中学校内のシス テムについて更新を行い、各 学年に供給することができ た。(高)教務規定を整理し、 観点別評価についての項目を 追記することができた。	(中)連絡進学のデータの学年 内での処理について不具合が 生じていたので、何らかの強 力ができるか検討を図りた い。 (高)観点別評価以外にも、現 状と合っていない内容につい て、検討する必要がある。	A		A
						特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善案
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 生徒の将来の目標と 生徒を取り巻く社会の状況 も含めた進路についての意 識を深めさせ、その実現に 向けた支援を行う。	■進路指導部 (中) 生徒自らが、自身の 生き方・能力・関心・適性 を多面的・多角的に考え、 将来に対する目的意識を持 てるよう情報提供やサポー トを行う。 (高) 今年度も幅広く情報 を提供する。また、進路行 事として各学年団と連携し て多様な企画を考案する。 進路冊子をより良く改変す る。	(中) 面接練習の授業を通じ て、自己分析・自己展望につ いて冷静に考える機会を設け た。生徒は高校で何をがんば りたいのかを具体的に考える ことができた。 (高) 生徒の進路実現に有益 と思われる情報は終礼やクラ スルームを通じて配信した。 進路冊子も内容を改変するこ とが職員会議で可決された。	(中) 面接練習は学年だけで なく管理職も参加しての取り 組みであった。生徒への フィードバックを工夫すると より高い効果が期待できる。 (高) 進路の冊子の体験談の 卒業生の執筆依頼を開始する 時期を早める。	A		A	特記事項なし
	■保体科 授業を行う前後における運 動の場の安全確認は当然だ が、授業中も生徒がお互い に健康チェックを行う制度 を構築する。	生徒同士で活動中に声を掛け 合い、体調確認をすることが できていた。場の安全管理と いうことで走り幅跳びのピ ットやプールサイドの保金など に着手できた。	走り幅跳びのピットやプール サイドなど修繕できた箇所は あったが、テニスコートの床 面のはがれへの修繕に着手で きていない。	B	子供達はあまり綺麗でないイ メージがある。一定期間だけ の使用で費用等改修が難しい 場合もあるが安全性は維持し て貰いたい。	A	プールの経年劣化対応に 費用がかさむので、学外 施設の利用も検討する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 生徒の将来の目標と生徒を取り巻く社会の状況も含めた進路についての意識を深めさせ、その実現に向けた支援を行う。	■健康人権教育部 学校に内在する防犯、災害リスクに対して、生徒・教職員がその要因を共有し、予防的行動を適切に行えるよう、訓練やマニュアルの改善を行う。生徒・教員の減災・防犯意識を高められる安全教育の実現に取り組む。	授業外の時間に災害が発生すること想定した避難訓練を実施することができた。また、去年度の反省を活かし、点呼の体制を見直すことができた。防犯訓練においても、不審者対応や取り押さえのプロセスを取り入れ、不審者侵入時における学校全体の動きを確認することができた。	休み時間や放課後に災害が発生することを前提とした避難訓練の実施が求められる。また、管理職不在時における警察・消防との連携、避難民への対応など、有事の際を想定した検討が必要である。防犯訓練についても、池田校舎を範としたより実践的な訓練の実施が求められる。	B		A	特記事項なし
■音楽科 生徒が安心して音楽活動に取り組むことができるよう、生徒と教員が協働し、音楽を奏でる空間の環境整備をすすめる。	掃除当番だけではなく音楽室を使用するすべての生徒に対し、清潔かつ整った環境で音楽を奏でることができるよう意識づけをおこなった。また、生徒自身のアイディアも取り入れ、楽器の置き場所の変更や音楽を主体的に学ぶための環境整備をすすめた。	本校の音楽室には楽器庫がなく、楽器を安全に保管する場所がない状況が続いている。引き続きこの状況の改善を具申し、生徒たちが安心して芸術活動ができる環境を整えていく。	B			A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	意見・理由	評価	
(1) 生徒の将来の目標と生徒を取り巻く社会の状況も含めた進路についての意識を深めさせ、その実現に向けた支援を行う。	■技術家庭科 技術・家庭科での実践は、食材を扱う調理実習やはんだ付けなどやけどの危険性のある作業が出てくる。それゆえ、他教科と比べて指導する教員が意識して安全対策や実践後の清掃指導を実施するなど、環境整備を図ることが生徒の健康と安全を守るために必要である。	技術・家庭科の授業を通して、知識理解だけでなく、技能獲得において、班などのグループで教え合うことで、協働学習の要素が向上した。また、科目の特徴を活かす指導を実施した。	実習や授業を通して、生活の中にはさまざまな技術が活用されていることに気づき、また社会問題を解決していくために新たな技術開発されていることに気づかせ、その担い手になれるような展望を持たせたい。	子供の反応は今の内容で十分のようです。分かりにくい事も他の生徒と教えあえている事からすれば合格点ではと思います。	B	特記事項なし
					A	

6 附属天王寺中学校の令和6年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準				
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である	
B	達成できた	B	おおむね適切である	
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない	
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない	
		E	判定できない	

学校教育目標	・正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ・強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ・他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ・社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。		
学校教育計画	3、学校独自の取組みを通してカリキュラム全体の充実を図り、教育実習・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。		

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	意見・理由	評価	
(1) 最近の学力観をふまえてつつカリキュラムマネジメントを実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探るとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積、発信する。	■教務部 - ロイロノートやGoogleWorkspaceといった授業支援ツールの運用や運用支援、GIGA端末やBYOD端末の運用支援を図り、ICTを活用した授業実践の支援を行う。(中)第2次GIGA構想を念頭に置きながら、次期ICT端末の運用について、検討を行う。(高)授業におけるICT活用について調査し、その結果をもとにICTを有効に活用した授業実践について検討する。	授業支援ツールの管理運用を行うとともに、生徒用端末の運営支援をはかり、授業環境を適切に担保することができた。 (中)次期GIGA端末の運用を念頭に置きながら、職員内での意見集約を行い、端末の選定を行うこと画できた。 (高)ICT活用の現状について調査し、授業実践について検討することができた。	(中)次期デバイスの運用について引き続き検討を行う。 (高)引き続き、ICT活用の現状について調査し、検討する必要がある。		A	次期GIGA端末をiPadに変更させる。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	意見・理由	評価	
(1) 現代的な学力観に 対応した教科指導法の工 夫と、カリキュラム全体 の改善を図る。また、I CTを活用した学習指導 の実践を進め、その効果 と課題を深める	■生徒指導部 生徒会活動や附高祭、音楽 祭、百軒徒歩などでICT活 用を実践する。その実践の 中で情報機器の取り扱いや 情報モラルの指導を行い、 生徒の情報リテラシーの向 上にむけて適切な支援を行 う。	様々な行事において、ICTを より効果的に活用できるよう に指導することができた。ま た、情報モラルの育成のため の企画や研修、指導などを 行い、生徒が安全に正しくICT を活用できるよう支援するこ とができた。	ICT機器のさらなる活用と もに、情報モラルの意識向上 も継続して行う。SNSとの付 き合い方については理解して いるが行動として伴っていな いと感じられる場面もあった ので来年度以降も引き続き情 報モラルについての指導が必 要である。		A	特記事項なし
	■研究部 年9回の推進日を活用し、 講師による研修を具体化さ せ、教員が協働し議論する 場を設ける。また、授業記 録の集約を行い、教科横断 や中高連携を促進する。	推進日を活用し、講師による 研修を行った。その際、教育 研究会の授業プランについて 助言を得る機会も設けること ができた。また、授業記録 フォーマットを作成し、情報 共有を行った。	授業記録については、全教 科・全教員が日常化する取り 組みとはならなかった。記録 をつける目的に対して作業の 負担が大きかったように思わ れる。できるだけ負担の少な い形での情報共有の促進が必 要である。	クラス減も予定され教員にも 限りある事から日常化はなか なか難しいとは思われます。	A	
	■国語科 文学や古典など、最近の学 力観では軽視されがちな分 野において、中高連携しな がら、その価値を再検討 し、適切な指導を行う。	教育研究会においては中高と も、古典を題材とした授業を 発表し、その価値を検討する ことができた。また、小中高 研究部会の中では、文学教材 を用いた授業を実施し、系統 的な指導のあり方について検 討することができた。	引き続き、小中高で連携をと りながら指導を行いたい。と きには中高で担当教員を交換 して行う授業なども有効だと 考える。		A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 現代的な学力観に 対応した教科指導法の工 夫と、カリキュラム全体 の改善を図る。また、I CTを活用した学習指導 の実践を進め、その効果 と課題を探る	■社会科学 中高で議論を行いながら協 力し、他教科と連携できる 社会科の学習内容について 検討する。その検討内容を ふまえて、教科横断的な視 点を持った授業を実践し、 発信する。	他教科と連携可能な社会科の 学習内容について一定程度議 論し、健闘することができ た。しかし他教科と連携し て、教科横断的な授業を実 践、発信することはできな かった。	他教科との関りが深い分野に ついて、他教科に対して発信 し、情報を共有する必要があ る。	B	今回、子どもの意見も聞きな がら回答しました。教科横断 的な授業の記憶はないが、今 後、そんな授業を受けてみた いということだったので、cを つけました。	C	教科横断であることを 事前に伝える。
	■数学科 教科横断的な学習指導を取り 入れた教育内容開発・授 業実践を試み、教育研究会 で公開する。また、イベン トとして「教科横断」を行 うのではなく、日常の授業 の中で教科横断に触れられ る機会があれば、規模の大 小問わず積極的に教科横断 学習を行う。	教科横断的な学習指導を取り 入れた教育内容や授業実践を 開発し、教育研究会などで公 開している。また、日常の授 業の中でも他教科と関連づけ られるテーマや活動を積極的 に取り入れることで、継続的 な教科横断学習の文化が形成 されつつある。	他教科との連携を進めるにあ たっては、カリキュラムの整 合性や時間割の調整、教員同 士の指導観・評価観の違いな ど、実際に運用していく上で さまざまな課題が顕在化して いる。そのため、教科横断的 学習を学校全体で連携し実施 できる意識づくり・体制づく りが必要となる。	A	先生側のレベルアップだけに ならず生徒達の負担になる様 な内容にならないければ良いと 考えます。	A	生徒の成長を評価する ことを大前提として実 践する。
	■音楽科 表現領域と鑑賞領域を横断 した音楽科カリキュラム開 発をすすめ、その効果と課 題を探る。	本研究課題をもとにした授業 を中学校・高校両方で実践 し、第71回教育研究会にて研 究発表をおこなった。新たな タイプの音楽科授業を提案す ることができ、生徒たちの学 びの可能性が広がった。	引き続き本研究課題における 指導実践を蓄積し、領域横断 することによって学びがどの ように深まるのかを分析す る。	A		A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 現代的な学力観に 対応した教科指導法の工 夫と、カリキュラム全体 の改善を図る。また、I CTを活用した学習指導 の実践を進め、その効果 と課題を深める	■理科 「探究的に学ぶ姿勢」を育 むために、理科という枠組 みにとらわれず広い視野で 情報収集し活用することを 促すような授業を実践す る。その際、ICT機器を 目的に応じて有効活用させ る。	中学校では、津波に対する防 災の学習で、気象庁のデータ や各自治体の防災マップなど の情報収集をさせるなど、I CTを目的に応じて有効に活 用させた。高等学校では、科 学者の視点や姿勢について取 りあげ、理科の枠にとらわれ ない視点や文献をもとにして 考えさせる、教科横断的な実 践を行った。	生徒の変容を的確にとらえる パフォーマンス課題やその評 価の方法を検討する必要がある。 授業の準備から評価まで の一連についての教材化を進 める。	A		A	特記事項なし
	■美術科 問題解決学習、パフォーマ ンス課題を協働で取り組む 学習法から、発想や技能を 相互に交流、影響し合える 授業設計と実践。	カリキュラムマネジメントの 視点から、国語科の映像表現 の読み取りと美術の映像作品 の制作を系統的に実施。生徒 の教科横断意識の醸成をはか ることを目的とした授業実践 を行った。	昨年同様、理科との連携およ び今年度は国語科との連携も はかったが、他教科との実施 には至らなかった。今後、多 くの教科を巻き込むため、授 業者間で授業の本質的は学び やその実践方法などの共有を はかる。	B	あまり教科書を使わずスライ ド説明から実践への展開と聞 いてます。横断意識は他教科 との兼ね合いが難しいですが 継続頂ければと思います。	A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 現代的な学力観に 対応した教科指導法の工 夫と、カリキュラム全体 の改善を図る。また、I CTを活用した学習指導 の実践を進め、その効果 と課題を探る	■保健科 ICT機器を利用した動画の 撮影やチームでの活動を通 して、個人・チームの課題 を解決しながらお互いに成 長し合えるように協働的な 活動を取り入れる。生涯ス ポーツを視野に入れながら 他教科と横断的な学習を取 り入れる。 ■英語科 他教科教員と協同し、教科 横断的授業を各教科のカリ キュラムをもとにその効果 と課題を探る。	陸上競技や器械運動のマット では動画を撮影し、自らの動 きを客観的に振り返り、課題 を解決するための時間を作る ことができた。 アルティメットなどの球技に おいても試合動画を確認し、 作戦や課題を客観的に確認す る時間を作ることができた。	ICTの活用によって、運動の 改善や自身の運動への気付き の向上はあったものの、運動 機会の確保や時間の確保とい う面で授業の計画に課題が 残った。	A		A	特記事項なし
		教科横断について見識を深 め、日常のカリキュラムの中 でそれぞれが取り組むことが できた。 (中) 国語科との教科横断授 業を行うことができた。教科 横断での学びを通して、古文 と英語とのつながりや、英語 と日本語それぞれの言語の奥 深さにも気づくことができ た。 (高) 教科書の題材に合わせ て、深い学びに繋がる教科横 断的な学びを検討し、各科目 で実施することができた。	教材作成などに時間がかかる という課題がみえた。	A		A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	意見・理由	評価	
(2) 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。	■進路指導部 (中高) キャリアパスポート(生徒が活動を記録し蓄積するもの)について中1～高3で実施。特に高校では高3が初めて3年間実施した学年になる。中高で書式・構成など、実際の生徒や担任の声を聞きながら改良していく。また、中高で引き継ぐにあたってどのようにつながることができるのかを検討する。	(中) 面接試験の際にまとめた自己分析と自己展望をキャリアパスポート最後のページに書き添えることを計画し、実践した。 (高) 学期や行事の節目で記入するよう指示し、その時間を設けた。	(中) 高校入学後に記録を振り返る機会を設けると中高連携がよりよく行われると考える。 (高) 連進生は高1時点で各担任に提出し、面談等で役立てたい。中高の連携部分で、生徒からの提出を必須とする。 来年度以降も連携方法については継続して検討する。	中高一貫の連携はとれていると思います。中学でのキャリアパスポートの分析展望は難しい感じがしますが生徒自身で成長する上で必要で期待されます。	A	特記事項なし
	■生徒指導部 体育大会や学芸会、附高祭などの行事を通じて生徒に社会の多様性について考えさせる機会を作り、生徒たちが互いの意見を共有し、尊重し合う機会を作る。また中学と高校で定期的に情報共有の場を設け、生徒の多様性に対応するための効果的な取り組みについて議論します。	中高とも、様々な行事を通じて、生徒同士が意見を共有し、互いに尊重し合う姿勢が見られた。特に中学校の学芸会や高校の附高祭では、各クラスで考えた演劇や取り組みを進める中で、多様な価値観に触れる機会を多くつくれた。一方で、中高での教員間の情報共有は実施できたものの、中高の生徒同士が互いに関わるような取り組みについては、実施することはできなかった。	行事が終わったあとに生徒たちの意見を共有する場面をより意識的に増やすために、行事の前後で振り返りの機会を設けることを継続させていきたい。 中高の情報共有については、頻度や内容を見直し、共通課題をより明確にし、具体的な実践につながる仕組みを強化する。		B	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(2) 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。	■社会科学科 公民的資質の育成という社会科で育てたいコンピテンシーについて共有し、中高で現在の取り組みについて情報共有を密に行いながら、授業見学を積極的に実施する。	公民的資質というコンピテンシーについては共有することができた。 中高での情報共有はできているが、授業見学を行うことはほとんどできなかった。時間割を調整するなどして、積極的に取り組んでいく必要がある。		A		A
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	■研究部 「コンピテンシーを軸にした附属天王寺型STEAM教育開発」について地域に発信し交流するため教育研究会の実施を広く発信する工夫を行う。集録を通して、本校の研究内容を発信する。	教育研究会には、全国から200名程度の参加があり、本校の研究成果を広く発信できた。またその際、従来の教科の公開に加え、附属天王寺型STEAMの授業や中学校自由研究のポスター発表を公開することができた。研究集録においては、各自の研究成果と教育研究会の報告を掲載することができた。	附属天王寺型STEAMの授業公開ができたことは大きな成果であるが、授業者にとって大きな負担（企画立案やスケジュール調整等）になっているため、毎年定例的に実施することは困難である。自由研究のポスター発表は担当教員や発表生徒、研究会参加者にとって有益であり、発展的な継続が望まれる。	A	附天の良さを継続して発信して頂く事で今後も良い人材が集まると思っています。	STEAMの実践は目的ではなく、あくまでも手段であることを理解し、教員自身が楽しめる教材開発・実践を目指すべき。
■英語 各学年において令和3年度作成のCAN-DOリストの3年目を迎え、その内容を精査し、各学期末には生徒一人ひとりが課題を設定し、解決できるような授業実践を行う。	生徒一人ひとりが、課題を設定しながら協同的に学習を進められるように様々な工夫をすることができた。	協同的な学びを意識しながら、個々の学びも深められる授業づくりを目指す。また、Can-Doリストの作成、および活用から3年が経ったため、随時アップデートを行う。		B		特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	■音楽 日々の授業実践や生徒が生き生きと芸術活動に取り組む姿をホームページ等で積極的に発信する。	本校の特色ある取り組みや生徒の活躍を、教育研究会や本校ホームページなどを通して広く発信することができた。	本校の教育実践や生徒たちが音楽を心から楽しみ表現する姿を、保護者や地域の方々、教育関係者に向けて積極的に発信を続け、本校が考える音楽科教育の存在意義を様々な形で伝えていきたい。	A		A	特記事項なし
	■国語科 教育研究会および近附連国語科部会などにおいて、本校の実践を発信し、他校の実践・提言を踏まえ、カリキュラムマネジメントを行い、よりよいカリキュラムを作成する。	教育研究会および近附連国語科部会において、本校の実践を共有することができた。また、議論の中で、カリキュラムマネジメントについて情報交換を行い、より良いカリキュラムの手がかりを得ることができた。	中長期的な見通しを持ったカリキュラムマネジメントが必要である。	B	生徒達にとって良いカリキュラムになる様に継続実施して頂きたいと思います。	A	特記事項なし
	■理科 より高次の探究的活動として実験・実習に取り組ませるような授業を実践し、その内容と分析を教育研究会及び研究集録にて広く発信する。	「資質・能力の育成支援における手法の深化と評価の検討」という中高共通のテーマを設定し、授業実践に取り組んだ。教育研究会では公開授業を行い、研究集録では前後の授業も含めた全容を報告するなど、成果を対外的に広く発信した。	中高理科で設定している「6年間で育成したいコンピテンシー」および「実習・実験の探究のレベル」の指標に照らし合わせて今年度の実践を分析・評価し、来年度の目標設定に繋げる必要がある。	A		A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	■技術・家庭 技術・家庭科は、幅広い知識・技能を養うことができ、科目であると考ええる。単に、ものづくりを行うだけでなく、社会に出ても有効な知識・技能であること、授業を通して指導すること、今後の生活につなげる教育実践を行う。	教育研究会をテーマにするこ とにより、技術・家庭科と他 教育とのタイアップにより、 1つの教科では実現しにくい 新しい実践が可能になった。 それにより、「金融教育」を テーマとした新しい実践を広 めることができた。	「金融学習」をコンテンツ ベースで他教科と取り組むだ けでなく、さまざまな教科で の学びを技術・家庭科を通し て日常生活の気づきにつな げ、生活を豊かにしていく考 えを持たせる授業を展開して いきたい。	A		A
	■美術科 光村図書出版株式会社の令和7年度版中学校教科用図 書「美術」編集委員とし て、日頃の研究で得られた 成果を地域社会へ還元奉仕 する。	編集委員として令和7年度版 教科用図書（美術）の編集に 関わる。今年度は教科書選定 の年にあたり、過去一番の採 択率となったことへ尽力でき た。	教育大附属ということから公 立学校が設立する研究団体へ の所属が叶わず、情報が不足 していた。より一層、幅広く 教育関係諸団体との情報交換 をはかる必要がある。	A	教科書編集に関わった事は良 かったが教育団体が垣根なく 情報交換出来る様になれば良 いと思います。。	A
					教科書編集に関わった事は良 かったが教育団体が垣根なく 情報交換出来る様になれば良 いと思います。。	特記事項なし